



# 大野道邦先生から引き継がなければならないもの (大野道邦先生を偲ぶ)

竹中, 克久

---

**(Citation)**

社会学雑誌, 34:231-232

**(Issue Date)**

2018-07-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCDOI)**

<https://doi.org/10.24546/81011720>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011720>



少しずつでも研究を進めていきたい  
と思います。

## 大野道邦先生から 引き継がなければならないもの

竹 中 克 久

(四五期生)

明治大学専任准教授

「コンコンコン」と教室のドアを  
ノックする音がする。もちろん、そ  
のノックは大野道邦先生が鳴らす音  
に他ならない。

「僕は学生に敬意を払っておる。  
だから教室に入るときはノックをす  
ることにしている。二回だと失礼だ。

ただ、四回以上だと距離が遠い。だ  
から三回ノックするのが僕のスタン  
スだ」と後に聞くこととなった。

私と大野先生の出会いは一九九三  
年のことであった。私は一年次の専  
攻別ガイダンスにて、社会学専攻の  
教室にいた。六甲台キャンパスの大

教室で開講された教養科目「社会  
学」を大野先生から拝聴したからで  
ある。エミール・デュルケームの「集  
合的沸騰」「シンボル」徽章」やマツ  
クス・ウェーバーの「行為の四類型」  
を正確かつ丹念に講じられる大野先  
生の講義時間は、私にとってかけが  
えのない時間であった。現代社会や  
日常生活などで言葉にできなかった  
体験が、精密に言語化されていく快  
感を味わえる希有な時間であった。

四年次に入り、就職活動に疑問を  
抱くようになった私は、大学院に進  
むことを考えるようになった。夏期  
休暇に入る前に、その旨を大野先生  
に伝えた。ところが、開口一番「君  
には基本的能力がない」と論された。  
そこで反骨精神が生まれ、むかえた  
冬の大学院入試では合格し、進学を  
認められた。その際、指導教官の大  
野先生は、私の卒業論文を手に取り  
ながら、次の言葉を私に授けてくだ  
さった。

「君、社会学で組織論をやりたまえ。いま、社会学では組織論は流行ってはいない。しかし必要不可欠な学問だ。次に流行が来るのが来年か二〇年後かわからない。君はそれをやりたまえ。」

果たして、二〇〇九年、私は明治大学情報コミュニケーション学部にて「組織論」担当の専任教員として採用された。まさに大野先生の先見の明を感じた瞬間であった。

ようやく大野先生と同じ社会学教員となれた喜びを感じながら日々を過ごしていたところ、神戸大学大学院の先輩から着信があった。嫌な予感でしたが、連絡があるとするならばこういう時ではないかとも思った。

訃報であった。

それを受けて、大野先生の葬儀にかけつけた。そこでは、多くの先生や諸先輩方の沈痛な面持ち、奥様の  
大野先生へのご愛情、ご子息・ご令

嬢の大野先生への感謝と親愛がないまぜになっていた。その葬儀において、牧師の先生が以下のような言葉を述べられた。

「人は何も持たずに生まれてくる。そして何も持たずに旅立つ。しかし、何かを残していくことはできる。」

大野先生が残されたものは何だろうか。おそらくそれは学問に対する真摯な姿勢、学生に対する敬意、そして次世代の学者への激励であろう。私はそれを引き継ぐことができらうか。日々、自問自答しながら、学生に接し、その途を探っている。

